

尤平夫全集 第一卷

大平夫全集 第一卷

岩波書店刊行

左千夫全集 第一卷

第二回配本(全八卷)

昭和五十二年一月十日 発行 ©

定價三八〇〇圓

著 者 伊 藤 左 千 夫

發行者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 東京都千代田區一ツ橋三丁目五
番地 株式會社 岩 波 書 店

電話 三二三六・三三二二
振替 東京六三三〇

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

明治二十四年	三
明治二十五年	四
明治二十八年	五
明治二十九年	七
明治二十九年乃至同三十一年	一六
明治三十一年	三
明治三十二年	二四
明治三十三年	二七
明治三十四年	九
明治三十五年	一六
明治三十六年	二三
明治三十七年	二七

明治三十八年	三二七
明治三十九年	三八七
明治四十年	四三四
明治四十一年	四八四
明治四十二年	五三〇
明治四十三年	五四二
明治四十四年	五五二
明治四十五年・大正元年	五六四
大正二年	五七三
年次未詳	五八七
俳句	五九一
後記	五九七
初句索引	六二五

歌

集

明治二十四年

〔消息の歌 三月二十六日伊藤良作へ〕

ひたすらに我父上よまちはべる都ノ櫻咲かんとそせば

〔とく、剛太郎と寫眞をとりて〕

のどかなるやさすか浦の月影とともに詠むる時をしぞ思ふ

消息の歌 上總國武射郡成東町殿
臺の郷里の父に寄せた三月二十
六日附はがき(圖東京伊藤幸二
郎に一首記載。制作年次明ら
かな歌の最初のもの。)

とく、剛太郎と…寫眞臺紙の裏
面に「明治廿四年五月十五日寫
之 伊藤幸次郎貳十六年十ヶ
月 同とく十八年十ヶ月 同剛
太郎〇十ヶ月」とするし、その
左に歌を二行に縦書きにした。
第二句「やさすか浦」の「す」は
「矢刺か浦」の訛音。
第四句「ともにながむる」とよ
む。

明治二十五年

〔消息の歌 一月二十四日伊藤芬へ〕

心せよ三冬の寒さ忍はすは梅の芬りもすくれさらめや

消息の歌 成東町殿臺の生家を繼いでいる長兄廣太郎に宛てた一月二十四日附はがきに、「終リニ芬（かをる）へ一言：左ノ歌ヲ玩賞シテ見ヨ」として一首記載。芬は長兄の長男で、後に左千夫の牛舎で働いた。

明治二十八年

〔消息の歌 乙未歳旦年賀狀伊藤良作へ〕

何處ともかわらざるらんあらたまの年を壽く人のこゝろは

〔蒲田觀梅〕

師走よりむ月きさらき見もあかて彌生のけふも梅を問ふかな

梓弓春も彌生の空にさへ梅かかまたと匂ふとし哉

大御代の恵みと思ふ牛ならぬ烟り車にうめを問ふとは

梅の花主なき園に匂へとも高き心を見る人そ見る

消息の歌 上總國武射郡成東町殿
臺の父に宛てた年賀狀（消印28・
1・2）に一首（東京伊藤孝二
郎）記載。

蒲田觀梅 同業で茶と歌の友であ
る伊藤並根が「蒲田觀梅の記」
と題し、「明に治まれるはたと
せ八まわりの年彌生の五日朝ま
たきより空晴れ渡りてゆふへの
兩名残さへ見えすいと長閑也け
りおのか言葉の友春園ぬし今日
は蒲田の梅見はやと兼て契りし
こととて午の時近き頃より吾輩
の宿を打つれ立ていてぬ」とい
う詞書にはじまる二人の作歌を
交互にしるした歌まじり文から
左千夫の歌を抄した。右記録の
所在不明のため山本英吉著『伊
藤左千夫』四版掲載によった。

風薫る梅の園生に尋きて又鶯の聲もきくかな

春風のそよく夕は袖か浦浪もかまたの梅ににほはん

かまたとは聞し言はの誤りか盛過にし梅のはな園

いつかまた梅を尋ん折もかな都にさへもたくひなければ

花代に歌をは讀まん梅の主我に一枝折るをゆるせよ

圈①②春園、③はるその、④—
⑨春その。
③第五句並根記「うし」は誤記
として訂した。

明治二十九年

〔消息の歌 三月十九日伊藤並根へ〕

月の中に幾たひきぬる君なから猶またれつるあすにもある哉

井伊直弼三十七回忌

はることに庭の柳をなかめつゝめてしむかしのひとやこふらむ

〔九十九里の濱〕

明治はたとせあまり九と云ふ年の初秋故郷なる九十九里の濱に旅し折よめる

武夫の矢刺か浦の夕風にひかり涼しき弓張の月

消息の歌 伊藤並根の詠草手記に記載されていたもので、並根記の「春園おとづれして」の詞書が附してある。右記録の現所在不明のため表記は『伊藤左千夫』(山本)によった。

井伊直弼：井伊直弼の三十七回忌記念歌集『宗観院追遠集』(明治29・10・8發行、伊藤並根舊藏・篠田英雄氏藏)に伊藤並根と各一首(圖伊藤春園)掲載。右歌集には桐廬舎桂子の出詠が見られ、すでに桐廬舎歌會に關連があつたことが推定される。

九十九里の濱 圖伊藤春園。半紙一枚に墨書した左千夫草稿(伊藤芬舊藏・山本英吉藏)によつた。

秋風につくもか濱の糸薄おもひかねてや亂れそむらん

撫子も匂へる野へにきり／＼すむかしこひしき言にも鳴哉^お

此ゆふべ秋の初風みにしみていと都の空そこひしき

〔消息の歌 十月二十一日伊藤並根へ〕

都をばきのふ出つるまちかねし心み山に紅葉尋ねて

紅葉

いかはかり紅葉の色や深からん山また山のおくをわけなは

はる／＼ときしやに訪へはや紅葉しゝ紅葉のかけの猶もまたるゝ

時の間に關の東の大原を渡りてきしやのあな心地よや

たつねきてふもとに宿る宵の間もなほ待れぬる峯の紅葉

消息の歌 伊藤並根の詠草手記の

欄外に記載(圓春園)されていたもの。齊藤茂吉著『伊藤左千夫』によった。日附は次掲詞書の神無月二十日出發より推定。次の「紅葉」⑥とは第三句に小異がある。

紅葉 園なし。署名は附していないが、左千夫記と推定しうる歌まじり紀行の草稿(伊藤芬舊藏・春木千枝子氏藏)から作歌を抄出したもの。全文は第二卷三頁に收載。

來てみれハあなかしましや山里ハ峯の嵐に谷川のおと

都をはきのふいてつるあくかれし心みやまに紅葉たつねて

おのかしゝ霜やおきけん山／＼の紅葉の色ハうすくこくして

炭かまの煙あはれに立てるかな紅葉色こき峯のかひより

もみち葉の八重かさなれる谷そこにさやかにみゆるたきつ白浪

瀧のみや巖にかゝるもみち葉の錦のうらもなめられつゝ

もみち葉の錦おりたる山にしもたかぬひそへし白糸のたき

宿ことに錦のまきゆひつゝも山里いかに秋はうれしき

おもしろや秋の山里來てみれば家峯の宿木そも紅葉して

仲／＼に住まほしくも見ゆるかな紅葉にかこふ山賤か庵

⑥前頁伊藤並根への歌と第三句の「まちかねし」が異なるのみである。

わけ入れは紅葉いよ／＼色深しおくに立田の媛やますらむ

毛の國や黒かみ山の峯ふりてたへす棚ひく天津白雲

屏風巖おのか名におふものならハ谷間の紅葉風にちらしな

唐錦もみちの山の木のまより千ひろにかゝるたきの白糸

紅葉せぬ山こそなけれ玉くしけ二荒の山につゝく山／＼

あふく峯見おろす谷も幾千ひろ梢残らす紅葉しにけり

紅葉のまひて散るみゆ瀧つせの水の煙にうつまかれつゝ

山をふるひたきひゝくなり秋ことに紅葉ハちるかしつ心なく

唐錦おりかさねたる紅葉山ひらくるまゝにみゆるみつうみ

湖に縁ゆつりて山の美は秋しりかほに紅葉しにけり

の第五句「ちらすな」の訛音。

もみち葉や三里の海にみちぬらん夫た羅の山に嵐ふく日は

紅葉をかさしにしつゝ降りくれば細谷の峯に月さし昇る

紅葉てる色にしはしは夕月も光ゆつりてみゆる山の端

てりまさる紅葉の山も夕され八月そかへさのたよりなりける

こゝもまた秋やよからん故郷の小倉の山の名をうつしつゝ

此あたり春のけしきやいかならん秋さへ山に鶯のなく

秋きりの名におふ山を立田媛なとそめ残すたきの白いと

きりふりの山とハ云へと瀧つせの浪の花にハ秋なかりけり

山川の岩うつ浪の花をたに薄紅ひにそむる秋かな

今宵また秋の深山にやとりせん紅葉のにしきうち重ねつゝ

紅葉てる山に煙をたてよとハ炭やく賤にたかをしへけむ

山かけに紅葉のにしき片しきて賤か乙女やたれをまつらん

山深くきのふもけふもわけいりぬあかぬ紅葉のなこりをしさに

唐錦紅葉の枝を折りくればしらぬ人さへこひしかりけり

もみち葉を手ことに折りてくるさへをこひしとおもふにたをやめにして

みんと思ふ心ふかくもわけいりて紅葉の山にけふもくれぬる

「
40

玉くしけ夫た羅の山の大御神今宵はかりハ雲なおこしそ

又とてハいつの世か見ん紅葉ちる歌か濱への秋の夜の月

紅葉のあやをる浪をこきわけて歌か濱へに月をまつかな

みきもなく友もなければとおもしろや紅葉たゝよふ湖の月